論文の内容の要旨

論文題目　　メキシコにおける機能主義建築と地域主義建築に関する研究
――ルイス・バラガン(1902－88 年)とファン・オゴルマン(1905－82 年)を事例として

氏　名　　大津　若果

ある目的に適した手段は、機能的と呼ばれる。その意味では、建築における機能主義は、日常生活の使用目的に適った機能を、形態は表現する必要があることとして理解される。しかし、機能的と呼ばれるものには、全体が十分に満足するように一部分が作用することも含まれている。この場合、全体そのものは、それに作用しない一部分とは全く関係がない。つまり、全体それ自体は、例えば、日常生活にとって機能的であるとは限らないのである。20 世紀後半においては、20 世紀初頭の西洋近代建築へのさまざまな反動が起こった。そこで、少なくとも、さまざまな反動に見られる曖昧さを解消するために、それらの反動を類型化すると考えられることは、ある一点が共通していることである。それは、市場経済システムが機能的であることによって、日常生活が美から排除されることに対して、過去には、社会における使用目的の適合性と美的なものの自律性が結合することによって、美は日常生活を疎外しなかったということである。現在では、美は、建築作品に刻み込まれているだけではなく、日常生活にも行き渡っている。

これらに十分に注意を払い、本論は、次のことから、さまざまな反動に見られる曖昧さについて考察した。一つに、ルイス・バラガン（Luis Barragán, 1902-88)とファン・オゴルマン（Juan O'Gorman, 1905-82)をはじめとする建築家達を事例として、メキシコ建築における機能主義から地域主義が確立していく過程を、明らかにすることによってである。もう一つに、建築の形態と社会背景、思想との関係に、特に関心の目を向けることによってである。これらによって、本論では、次の三つを示した。第一に、1930 年代の機能主義とされるバラガンとオゴルマンの作品も、1940 年代後半からの地域主義とされるバラガンとオゴルマン作品も、それぞれが地域的なものと機能的なものとを含み、その作品を表していること、第二に、バラガンとオゴルマンの建築観は、地域の伝統を継承していること、第三に、バラガンとオゴルマンの作品は、前衛といった芸術という存在そのものが問われることから生じた芸術のように、自律性を保っていることである。

そこで本論は、それぞれの主題を九章に分けて述べた。第一章では、バラガンとオゴルマンの出生やメキシコの社会背景を検討した。第二章では、「メキシコ機能主義の1929-34年」に至るまでの前史として、1920年代のメキシコ建築の動向を追った。メキシコ革命後の政府にとっては、革命における主体を担った労働者や農民、あるいは、混血メスティソや先住民インディヘナに向かって、一つは、革命後の政府による政治の急進性を明示すること、もう一つは、革命後の政府の歴史における正統性を誇示することは極めて重要であった。その現れの一つは、1920年代のスペイン統治時代の植民地様式へのリヴァイヴァル、「新コロニアル様式」である。

第三章では、メキシコにおける機能主義建築が成立する契機として、1920 年代後半からのセメント産業の躍進について、広告宣伝の面から明らかにした。こうしたメキシコの建築ジャーナリズムの中に見出されるのは、建築家というよりもむしろ技術者による建築の技術的な革新と、セメント産業の販売戦略との二つの側面が、メキシコの機能主義建築の誕生に大きく寄与したこ

とである。

第四章では、「メキシコ機能主義の 1929-34 年」を分析した。1932 年に「近代建築・国際展」がニューヨーク近代美術館で開催され、『インターナショナル・スタイル』が出版されるよりも前の 1929 年に、オゴルマンによる〈セシル・オゴルマン邸〉が設計され、メキシコには、出版物に掲載された図版を通して、ル・コルビュジエをはじめとする西洋近代建築が導入された。それは「機能主義」と名付けられた。急速に始まり、1930 年代にかけて発展したメキシコの機能主義建築は、社会主義イデオロギーと経済性との両面からの魅力を持っていた。なかでも、1930 年代前半のオゴルマンの作品では、本体のヴォリュームを持ち上げている独立柱は、最小限の鉄筋を配したコンクリートによって、極限の細さが選定された。オゴルマンの場合、その図版を参照した 1920 年代のル・コルビュジエの形態よりも簡素なものとなった。

第五章では、1930 年代後半のバラガンの機能主義住宅を取り上げた。ここでは、カルデナス政権からアレマン政権に至るまでに、革命後の目標を、社会主義の実現から経済発展の達成へと大きく転換させたという社会背景に対応して、メキシコ・シティの新興地域の住宅は、興隆しつつある中間層の顧客達が投資することを目的として開発されたため、バラガンが建築の形態を機能主義の根本原則に帰そうとしたにもかかわらず、それから離反する形態が現れた。

第六章では、第二次世界大戦を契機として、メキシコに移住した西洋近代建築家達による思想自体が、機能主義から地域主義へと展開していく過程を述べた。その叙述の中心は、バウハウスの二代目校長を務め、1938 年にメキシコに拠点を移したハンネス・マイヤーと、同じく 1927 年の国際連盟本部のためのコンペティションで入選し、近代建築国際会議（CIAM）に最年少で参加した後、1939 年にメキシコに移り住んだドイツ人の建築家マックス・チェットである。

第七章では、バラガンとチェットによる〈ペドレガル庭園分譲地〉の開発、および 1940 年代のバラガンの作品を分析した。1940 年から 1943 年にかけての〈オルテガ邸〉では、過度な機能性を目的とすることで、柔軟さが欠如した形態による限定を和らげる役目を、一つ目は、組積造による建物、二つ目は、地域の伝統から生まれた独特の質感に与えている。1947 年から 1948 年にかけての〈バラガン自邸〉は、形態と機能の統一をまったく異なるやり方で打ち破っている。

第八章では、アレマン政権が主導した〈大学都市〉の建設と、ペドレガル溶岩地帯の洞窟の〈オゴルマン自邸〉を検討した。インターナショナル・スタイルがすでにメキシコに移入されたことで、機能主義は、当初持っていた意味を失い、資本主義の搾取の象徴として役立っているとオゴルマンは見なした。1940年代末に、オゴルマンは、ペドレガル溶岩地帯という地理に彼の自邸の形態を統合するという条件の下で、自らの芸術家としての立場を受け入れ、そうした不動産投機の土俵を離れる方策を見つけた。さらに、オゴルマンの場合、原始的なものと現在とが、連続している過去という時間意識を介在させることなく、直接結び付くという彼の主観性が、この洞窟の湾曲面に重なり合う先スペイン時代の題材に反映されている。それは、前衛と共通した特徴を持っている。そして、この自邸は、芸術市場に抗した無償の創造行為に捧げられた。

第九章では、晩年のバラガンとオゴルマンの活動を叙述した。また、カーンのソーク研究所の中庭についてのバラガンの助言などを例にとり、20 世紀後半のメキシコにおける地域性を考察した。

以上のことによって、本論は、順を追いつつ、バラガンとオゴルマンの建築と建築観について明らかにした。確かに、ここに取り上げたバラガンとオゴルマンという二人の建築家は、活躍した場所こそ違え、メキシコ建築における機能主義と地域主義との関係を単なる対立項以上のものとして理解した人物であった。すなわち、単純に後者が前者を乗り越えるわけではないということを明確に示した建築家であったと言える。